

「走れメロス」 太宰治

【目標】 作品の設定と構成、心情の変化を押さえます。

本文	心情
<p>メロスは激怒した。必ず、かの邪知暴虐の王を除かなければならぬと決意した。メロスには政治がわからぬ。メロスは、村の牧人である。笛を吹き、羊と遊んで暮らしてきた。けれども邪悪に対しては、人一倍に敏感であった。今日未明、メロスは村を出発し、野を越え山越え、十里離れたこのシラクスの町にやって来た。メロスには父も、母もない。女房もない。十六の、肉気な妹と二人暮らしだ。この妹は、村のある律儀な一牧人を、近々花婿として迎えることになっていた。結婚式も間近なのである。メロスは、それゆえ、花嫁の衣装やら祝宴のごちそうやらを買いに、はるばる町にやって来たのだ。まず、その品々を買い集め、それから都の大路をぶらぶら歩いた。メロスには竹馬の友があった。セリヌンティウスである。今はこのシラクスの町で、石工をしている。その友を、これから訪ねてみるつもりなのだ。久しく会わなかったのだから、訪ねていくのが楽しみである。歩いているうちにメロスは、町の様子を怪しく思った。ひっそりしている。もう既に日も落ちて、町の暗いのはあたりまえだが、けれども、なんだか、夜のせいばかりではなく、町全体が、やけに寂しい。のんきなメロスも、だんだん不安になつてきた。道で会った若い衆を捕まえて、何かあったのか、一年前にこの町に来たときは、夜でも皆が歌を歌って、町はにぎやかであったはずだが、と質問した。若い衆は、首を振って答えなかった。しばらく歩いて老爺に会い、今度はもっと語勢を強くして質問した。老爺は答えなかつた。メロスは両手で老爺の体を揺すぶって質問を重ねた。老爺は、辺りをはばかりる低声で、僅か答えた。「王様は、人を殺します。」</p> <p>「なぜ殺すのだ。」</p> <p>「悪心を抱いているというのですが、誰もそんな、悪心をもつてはおりませぬ。」</p> <p>「たくさんの人を殺したのか。」</p> <p>「はい、初めは王様の妹婿様を。それから、ご自身のお世継ぎを。それから、妹様を。それから、妹様のお子様を。それから、皇后様を。それから、賢臣のアレキス様を。」</p> <p>「驚いた。国王は乱心か。」</p> <p>「いいえ、乱心ではございませぬ。人を信ずることができぬというのです。このごろは、臣下の心をもお疑いになり、少しく派手な暮らしをしている者には、人質一人ずつ差し出すことを命じております。ご命令を拒めば、十字架にかけられて殺されます。今日は、六人殺されました。」</p> <p>聞いて、メロスは激怒した。「あまされた王だ。生かしておけぬ。」</p>	<p>激しい怒り (直接書かれている)</p> <p>強い決意 (「必ず」「除かねばならぬ」「決意した」強い意志を示している)</p> <p>正義感 (性格の説明がされている)</p> <p>※このように、心情や人物像がわかる箇所に線を引き、どこからどのようなことが分かるのかを書いていきましょう。また、人物が変わったら「老爺は」僅か答えた。」の箇所のように線の形を変えましょう。</p> <p>楽しみ</p> <p>遠慮感 平和な村とは反対の空気に恐怖</p> <p>不安</p> <p>理由を聞く自ら疑問に思っている不安</p> <p>恐れ (王の支配を恐れ発言を控えている)</p> <p>焦り 切迫感 (手持てはいらぬ)</p> <p>恐怖 (王に対する恐れ 自由に話せない状態)</p> <p>疑問 (理解できない身に腹を立てている)</p> <p>敬慕 羨望</p> <p>怒り 羨望</p> <p>悔い 羨望</p>
<p>【内容・出来事】メロスが町の不穏な様子に気がつき、王の政治に怒る場面。メロスは明るい気持ちで町へ訪れる。↓、町の出来事に気がつく。↓、王が人を殺しているのを聞く。↓、メロスは王を討つ決意をする。</p>	

本文	心情
<p>メロスは単純な男であった。買い物物を背負ったままで、その王城に入つていった。たちまち彼は、巡邏の警吏に捕縛された。調べられて、メロスの懐中からは短剣が出てきたので、騒ぎが大きくなつてしまった。メロスは王の前に引き出された。</p> <p>「この短剣で何をするつもりであったか。言え！」暴君ディオニスに、けれども威厳をもつて問い詰めた。その王の顔は蒼白で、眉間のしわは刻み込まれたように深かった。「町を暴君の手から救うのだ。」とメロスは、悪びれずに答えた。</p> <p>「おまえが？」王は、憮然とした。「しかたのないやつじゃ。おまえなどには、わしの孤独の心がわからぬ。」</p> <p>「言うな！」とメロスは、いきり立つて反駁した。「人の心を疑うのは、最も恥すべき悪徳だ。王は、民の忠誠をさへ疑つておられる。」</p> <p>「疑うのが正当の心構えなのだ、わしに教えてくれたのは、おまえたちだ。人の心は、あてにならない。人間は、もともと私欲のかたまりさ。信じては、ならぬ。」暴君は落ち着いてつぶやき、ほつとため息をついた。「わしだつて、平和を望んでいるのだが。」</p> <p>「何のための平和だ。自分の地位を守るためか。」今度はメロスが嘲笑した。</p> <p>「罪のない人を殺して、何が平和だ。」</p> <p>「黙れ。」王は、ざつと顔を上げて報いた。「口では、どんな清らかなことでも言える。わしには、人のほらわたの奥底が見え透いてならぬ。おまえだつて、今にはりつけになつてから、泣いてわびたつて聞かぬぞ。」</p> <p>「ああ、王は利口だ。うぬぼれているがよい。私は、ちゃんと死ぬ覚悟でいるのに。命乞いなど決してしない。ただ、——と言いかけて、メロスは足元に視線を落とし、瞬時だめらい、「ただ、私に情けをかけたつもりなら、処刑までに三日間の日限を与えてください。たった一人の妹に、亭主を持たせてやりたいのです。三日のうちに、私は村で結婚式を挙げさせ、必ず、ここへ帰つてきます。」</p> <p>「ばかな。」と暴君は、しゃがれた声で低く笑つた。「とんでもないうそを言うわい。逃がした小鳥が帰つてくると言うのか。」</p> <p>「そうです。帰つてくるのです。」メロスは必死で言い張つた。「私は約束を守ります。私を三日間だけ許してください。妹が私の帰りを待っているのだ。そんなに私を信じられないならば、よろしい、この町にセリヌンティウスという石工がいます。私の無二の友人だ。あれを人質としてここに置いていこう。私が逃げてしまつて、三日目の日暮れまで、ここに帰つてこなかったら、あの友人を絞め殺してください。頼む。そうしてください。」</p> <p>それを聞いて王は、残酷な気持ちで、そつとほくそ笑んだ。生意気なことを言うわい。どうせ帰つてこないに決まつている。このうそつきにだまされたふりして、放してやるのもおもしろい。そうして身代わりの男を、三日目に殺してやるのも気がいい。人は、これだから信じられぬと、わしは悲しい顔して、その身代わりの男を磔刑に処してやるのだ。世の中の、正直者とかいうやつばらにうんと見せつけてやりたいものさ。</p> <p>「願いを聞いた。その身代わりを呼ぶがよい。三日目には日没までに帰つてこい。遅れたら、その身代わりを、きつと殺すぞ。ちよつと遅れて来るがいい。おまえの罪は、永遠に許してやろうぞ。」</p> <p>「なに、何をおっしゃる。」</p> <p>「はは。命が大事だったら、遅れて来い。おまえの心は、わかっているぞ。」</p>	<p>単純 無警戒 行動が早</p> <p>正義感</p> <p>見下し</p> <p>激しい怒り (許せない気持ち)</p> <p>人間不信</p> <p>虚無感 羨望</p> <p>反発 (理解できない、正しくない人)</p> <p>怒り</p> <p>覚悟</p> <p>迷い</p> <p>家滅亡の憂鬱と責任感</p> <p>不信 後悔</p> <p>切実</p> <p>残酷 羨望</p> <p>試す 羨望 半分</p>

本文	心情
二 メロスはいくやしく、じだんだ踏んだ。ものも言いたくなくなつた。 竹馬の友、セリヌンティウスは、深夜、王城に召された。暴君テイオニスの前で、よき友とよき友は、二年ぶりで相会つた。メロスは、友に一切の事情を語つた。セリヌンティウスは無言でうなずき、メロスをひしと抱き締めた。友と友の間は、それでよかつた。セリヌンティウスは鞭打たれた。メロスはすぐに出発した。初夏、満天の星である。	悔し 信頼覚悟受け入れ

【内容・出来事】メロスが王に死刑を下されるが友を人質に三日間のやう子を待つ場面  
メロスが捕まり、王の処刑に引き出された。王から町を救うと告白。  
↓妹の結婚式を挙げるため、セリヌンティウスを人質に三日間のやう子を得る。  
↓セリヌンティウスは捕らえられ、メロスは急ぎ出発する。

本文	心情
三 メロスはその夜、一睡もせず十里の道を急ぎに急いで、村へ到着したのは明るる日の午前、日は既に高く昇つて、村人たちは野に出て仕事を始めていた。メロスの十六の妹も、今日は兄の代わりに羊群の番をしていた。よろめいて歩いてくる兄の、疲労困憊の姿を見つけて驚いた。そうして、うるさく兄に質問を浴びせた。 「なんでもない。」メロスは無理に笑おうと努めた。「町に用事を残してきた。またすぐ町に行かなければならぬ。明日、おまえの結婚式を挙げる。早いほうがよからう。」 妹は頬を赤らめた。 「うれしいか。きれいな衣装も買って来た。さあ、これから行つて、村の人たちに知らせせてこい。結婚式は明日だ。」 メロスは、またよろよろと歩きだし、家へ帰つて神々の祭壇を飾り、祝宴の席を調べ、間もなく床に倒れ伏し、呼吸もせぬくらい深い眠りに落ちてしまった。 目が覚めたのは夜だった。メロスは起きてすぐ、花婿の家を訪れた。そうして、少し事情があるから、結婚式を明日にしてくれ、と頼んだ。婿の牧人は驚き、それはいけない、こちらにはまだなんの支度もできていない、ぶどうの季節まで待つてくれ、と答えた。メロスは、待つことはできぬ、どうか明日にしてくれとさえ、とさらに押して頼んだ。婿の牧人も頑強であつた。なかなか承諾してくれない。夜明けまで議論を続けて、やつと、どうにか婿をなだめ、すかして、説き伏せた。結婚式は、真昼に行われた。新郎新婦の、神々への宣誓が済んだ頃、黒雲が空を覆い、ぼつりぼつり雨が降りだし、やがて車軸を流すような大雨となつた。祝宴に列席していた村人たちは、なにが不吉なものを感じたが、それでも、めいめい気持ちを引き立て、狭い家の中で、むんむん蒸し暑いのもこらえ、陽気に歌を歌い、手を打つた。メロスも満面に喜色をたたえ、しばらくは、王とのあの約束をさへ忘れていた。祝宴は、夜に入つていよいよ乱れ華やかになり、人々は、外の豪雨を全く気にしなくなった。メロスは、一生このままここにいたい、と思つた。このよい人々と生涯暮らしていきたいと願つたが、今は、自分の体で、自分のものではない。ままならぬことである。メロスは、我が身にむち打ち、ついに出発を決意した。明日の日没までには、まだ十分の時	責任感 悔し 心配、兄思い 事情を隠す覚悟 (不安にさせない) 焦り 照れ、喜び 切迫感 疲労、責任感 (結婚式の準備) 気がない、疲労 切望した願 必死 簡単には下らない性格 執念が強い 不安を隠す 抑える気持ち 喜び、気持ち (妹が結婚してくれる) 未練 (幸せな暮らしたい願) 強い決断

本文	心情
三 がある。ちよつとひと眠りして、それからすぐに出発しよう」と考へた。その頃には、雨も小降りになつていよう。少しでも長くこの家にぐずぐずとどまつていたかつた。メロスほどの男にも、やはり未練の情というものはある。今宵、果敢、飲宴に酔つてゐるらしい花嫁に近寄り、 「おめでとう。私は疲れてしまつたから、ちよつとご免こうむつて眠りたい。目が覚めたら、すぐに町に出かける。大切な用事があるのだ。私がいなくても、もうおまえには優しい亭主があるのだから、決して寂しいことはない。おまえの兄のいぢはん嫌いなものは、人を疑うことと、それから、うそをつくことだ。おまえも、それは知つてゐるね。亭主との間に、どんな秘密でも作つてはならぬ。おまえに言いたいのは、それだけだ。おまえの兄は、たぶんえらい男なのだから、おまえもその誇りをもつてゐる。」 花嫁は、夢見心地でうなずいた。メロスは、それから花婿の肩をたたいて、 「支度のないのはお互いさまさ。私の家にも、宝といつては妹と羊だけだ。他には何も無い。全部あげよう。もう一つ、メロスの弟になつたことを誇つてくれ。」 花婿はもみ手して、照れてゐた。メロスは笑つて村人たちにも会釈して、宴席から立ち去り、羊小屋に潜り込んで、死んだように深く眠つた。	自分を納得させる気持ち 充実した日々への未練 言いたいことを伝える 幸福感、ふれい、つとり 照れ、喜び 覚悟、落ちろ 疲れ、体がたない

【内容・出来事】村で妹の結婚式を準備、実行した場面  
メロスが村へ到着し、妹と婿に結婚を急いすし妹の結婚式を挙げる  
↓祝宴が開かれるし妹や花婿と話すし深い眠りについた

本文	心情
四 目が覚めたのは、明るる日の薄明の頃である。メロスは、跳ね起き、南無三三三、寝過ぎしたか、いや、まだまだ大丈夫、これからすぐに出発すれば、約束の刻限までには十分間に合う。今日はぜひとも、あの王に、人の信実の存するところを見せてやろう。そうして笑つてはりつけの台に上つてやる。メロスは、悠々と身支度を始めた。雨も、幾分小降りになつてゐる様子である。身支度はできた。さて、メロスは、ぶるんと両腕を大きく振つて、雨中、矢のごとく走り出た。 私は、今宵、殺される。殺されるために走るのだ。身代わりの友を救うために走るのだ。王の奸佞邪知を打ち破るために走るのだ。走らなければならぬ。そうして、私は殺される。若いときから名誉を守れ。さらば、ふるさと。若いメロスは、つらかつた。幾度か、立ち止まりそうになつた。えい、えいと大声上げて、自身を吐りながら走つた。村を出て、野を横切り、森をくぐり抜け、隣村に着いた頃には雨もやみ、日は高く昇つて、そろそろ暑くなつて来た。メロスは額の汗を拳で払い、ここまで来れば大丈夫、もはや故郷への未練はない。妹たちは、きつとよい夫婦になるだろう。私には、今、なんの気がかりもないはずだ。まつすぐに王城に行き着けば、それでよいのだ。そんなに急ぐ必要もない。ゆつくり歩こう、と持ち前ののんきさを取り返し、好きな小歌をいい声で歌いだした。ぶらぶら歩いて二里行き三里行き、そろそ	焦り (寝過ぎしたかとはないかと焦った) ↓安心 (また間に合うことに安心) 王を叱ると言わせてやろう、という気持ち ち燃えてる 死への覚悟、サボラき 切迫感 死への覚悟、責任感、使命感 つらい、苦しい、迷い 気合を入れる 故郷へ二度と帰らない決意 気のゆるみ のんき、ハイな気分

四 本文

ろ全里程の半ばに到達した頃、降って湧いた災難、メロスの足は、はたと止まった。見よ、前方の川を。昨日の豪雨で山の水源は氾濫し、濁流とうとうと下流に集まり、猛勢一挙に橋を破壊し、どうどうと響きあける激流が、こつばみじんに橋げたを跳ね飛ばしていた。彼は茫然と立ちすくんだ。あちこちと眺め回し、また、声を限りに呼び立ててみたが、繫舟は残らず波にさらわれて影なく、渡し守の姿も見えない。流れはいよいよ膨れ上がり、海のようになっている。メロスは川岸にうずくまり、男泣きに泣きながらセウスに手を上げて哀願した。「ああ、しずめたまえ、荒れ狂う流れを！時は刻々に過ぎていきます。太陽も既に真昼時です。あれが沈んでしまぬうちに、王城に行き着くことができなかつたら、あのよい友達が、私のために死ぬのです。」

濁流は、メロスの叫びをせせら笑うごとく、ますます激しく躍り狂う。波は波をのみ、巻き、あおり立て、そうして、時は刻一刻と消えていく。今はメロスも覚悟した。泳ぎ切るより他にない。ああ、神々も照覧あれ！濁流にも負けぬ愛と誠の偉大な力を、今こそ發揮してみせる。メロスはざんぶと流れに飛び込み、百匹の大蛇のようにのたうち荒れ狂う波を相手に、必死の闘争を開始した。満身の力を腕に込めて、押し寄せ渦巻き引きずる流れを、なんのこれしきとかき分けかき分け、獅子奮迅の人の子に神も哀れと思つたが、ついに機軸を垂れてくれた。押し流されつつも、見事、対岸の樹木の幹にすがりつくことができたのである。ありがたしい。メロスは馬のように大きな胸震いをつして、すぐにまた先を急いだ。「一刻といえどもむだにはできない。日は既に西に傾きかけている。せいでいらい呼吸をしながら峠を登り、登り切つてほつとしたとき、突然、目の前に一隊の山賊が躍り出た。「待て。」

「何をするのだ。私は日の沈まぬうちに王城へ行かなければならぬ。放せ。」

「どっこい放さぬ。持ち物全部を置いていけ。」

「私には、命の他には何も無い。その、たった一つの命も、これから王にくれてやるのだ。」

「その、命が欲しいのだ。」

「さては、王の命令で、ここで私を待ち伏せしていたのだな。」

山賊たちは、ものも言わず一斉に棍棒を振り上げた。メロスはひよいと体を折り曲げ、飛鳥のごとく身近の一人に襲いかかり、その棍棒を奪い取つて、「気の毒だが、正義のためだ！」と猛然一撃、たちまち三人を殴り倒し、残る者のひるむ隙に、さつさと走つて峠を下つた。一気に峠を駆け降りたが、さすがに疲労し、折から午後の灼熱の太陽がまともにかつと照つてきて、メロスは幾度となくめまいを感じ、これではならぬと気を取り直しては、よろよろ「三歩歩いて、ついでにがくりとひきを折つた。立ち上ることができぬのだ。天を仰いで、くやし泣きに泣きだした。ああ、あ、濁流を泳ぎ切り、山賊を三人も打ち倒し、韋駄天、ここまで突破してきたメロスよ。真の勇者、メロスよ。今、ここで、疲れ切つて動けなくなるとは情けない。愛する友は、おまえを信じたばかりに、やがて殺されなければならぬ。おまえは、希代の不信の人間、まさしく王の思つたつぼだぞと自分を叱つてみるのだが、全身委えて、もはや辛虫ほどにも前進かなわぬ。路傍の草原にごろりと寝転がった。身体疲労すれば、精神も共にやられる。もう、どうでもいいという、勇者に不似合いなふてくされた根性が、心の隅に巣くつた。私は、これほど努力したのだ。約束を破る心は、みじんもなかつた。神も照覧、

心情

驚き、衝撃 (不測の事態)

絶望、必死

命をかけて川を泳ぎ切る覚悟

必死、生への執念

幸運への感謝

焦り

安心、登り切った達成感

正義感

極限の疲れ、体力が尽きた

悔しさ

情けない、惨め

活を入れるも限界

投げやりな気持ち、あきらめ

四 本文

私は精いっぱいに努めてきたのだ。動けなくなるまで走つてきたのだ。私は不信の徒ではない。ああ、できることなら私の胸を断ち割つて、真紅の心臓をお目にかきたい。愛と信実の血液だけで動いているこの心臓を見せてやりたい。けれども私は、この大事なときに、精も根も尽きたのだ。私は、よくよく不幸な男だ。私は、きつと笑われる。私の一家も笑われる。私は友を欺いた。途中で倒れるのは、初めから何もしないのと同じことだ。ああ、もう、どうでもいい。これが、私の定まった運命なのかもしれない。セリヌンティウスよ、許してくれ。君は、いつでも私を信じた。私も君を欺かなかつた。私たちは、本当によい友と友であつたのだ。一度だつて、暗い疑惑の雲を、お互い胸に宿したことはなかつた。今だつて、君は私を無心に待っているだろう。ああ、待っているだろう。ありがとう、セリヌンティウス。よくも私を信じてくれた。それを思えば、たまらない。友と友の間の信実とは、この世でいちばん誇るべき宝なのだからな。セリヌンティウス、私は走つたのだ。君を欺くつもりは、みじんもなかつた。信じてくれ！私は急ぎに急いでここまで来たのだ。濁流を突破した。山賊の囲みからも、するりと抜けて一気に峠を駆け降りてきたのだ。私だからできたのだよ。ああ、このうえ、私に望みたまうな。放つておいてくれ。どうでもいいのだ。私は負けたのだ。だらしがない。笑つてくれ。王は私に、ちよつと遅れて来い、と耳打ちした。遅れたら、身代わりを殺して、私を助けてくれると約束した。私は王の卑劣を憎んだ。けれども、今になってみると、私は王の言うままになつている。私は遅れていくだろう。王は、独り合点して私を笑い、そうしてこともなく私を放免するだろう。そうなつたら、私は、死ぬよりつらい。私は、永遠に裏切り者だ。地上で最も不名誉の人種だ。セリヌンティウスよ、私も死ぬぞ。君といつしよに死なせてくれ。君だけは私を信じてくれるにちがいない。いや、それも私の、独りよがりか？ ああ、もういつそ、悪徳者として生き延びてやろうか。村には私の家がある。羊もいる。妹夫婦は、まさか私を村から追い出すようなことはしないだろう。正義だの、信実だの、愛だの、考えてみればくだらない。人を殺して自分が生きる。それが人間世界の定法ではなかつたか。ああ、何もかもばかばかしい。私は醜い裏切り者だ。どうとも勝手にするがよい。やんぬるかな。四肢を投げ出して、うとうと、まどろんでしまった。

心情

悔しさ、願ひ

投げやりな気持ち

友人の感謝

誇りに思っている

信じてほしい、裏切ることにはなつた

敗北感

絶望

信頼

絶望のどん底

価値観の崩壊、ヤクク、最低な気分

自己否定

自己嫌悪、気力の喪失

【内容・出来事】 必死に王城へ戻るも途中で様々な被害を受ける場面

メロスが村を出発する→橋が壊れているのを見つけて→濁流を泳ぎ渡る

→山賊におそわれる→正義のため倒す→暑さと疲労で倒れ、道端で眠ってしまう。



六	本文	心情
六	<p>群衆の中からも、敵敵の音が聞こえた。暴君ディオニスは、群衆の背後から二人のさまをまじまじと見つめていたが、やがて静かに二人に近づき、顔を赤らめて、こう言った。「おまえらの望みはかなったぞ。おまえらは、わしの心に勝ったのだ。信実とは、決して空虚な妄想ではなかった。どうか、わしも仲間に入れてくれまいか。どうか、わしの願いを聞き入れて、おまえらの仲間の一人にしてほしい。」</p> <p>どろどろと群衆の間に、歓声が起った。</p> <p>「万歳 万歳万歳。」</p> <p>一人の少女が、緋のマントをメロスにまきた。メロスは、まごついた。よき友は、気をきかせて教えてやった。「メロス、君は、真つ裸じゃないか。早くそのマントを着るがいい。このかわいい娘さんは、メロスの裸体を皆に見られるのが、たまらなくくやしいのだ。」</p> <p>勇者は、ひどく赤面した。</p>	<p>信実を見つけたことの感動      恥辱、恥      認め、自分の間真に恥      価値感の喪失、人間の信頼      喜び、歓喜      思いつき      戸惑い      照れ、我に返り、恥辱を覚えた</p>

【内容・出来事】

物語の結末

- ・メロスが刑場に到着し、セリタニテウスの死刑が中止
- ↓二人が互いに殴り合う ↓王が人を信じる心を認める
- ↓群衆が歓声をあげる ↓メロスが王人を受け取り赤面する。

○走れメロスのメッセージを考えましょう

太宰治が本作に込めたメッセージは、「人は弱さに負けて裏切りやうにほろけが、そこから立ち上がるうとする心が大抵である」ということだと思ふ。メロスは完璧な英雄ではなく、諦めかけて友を見捨てようとしたことを経験した。それでも自分を信じている友のために動いた。このことから、信らしている心は人を強くする、迷っても最後には誠実であろうとあがく心は尊いということが伝わった。読者へ勇気を送ってくれるものだと思ふ。(ダメは肝の自分を許して突き進む心が大抵だとエールが込められていると思ふ。)

